

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第二十一回）

くらなし はま

「倉無の浜の歌」

わぎもこ あかも

吾妹子が 赤裳ひづちて

きよ

植えし田を 刈りて蔵めむ

くらなし

倉無の浜

卷九—1710

（解説）

わが妻が赤い裳の裾を泥にぬらして植えた田を、刈り取って収めようにも収めきれぬ倉がないという名前の倉無の浜よ。

・この歌の作者について左注に「或は云はく、柿本朝臣人麻呂作」とあり、決定しがたい点もあるが人麻呂が筑紫に足を入れたことが巻三（三〇三〜三〇四）の題詞に「柿本人麻呂、筑紫の国に下る時に、海道にして作る歌二首」とあることによりわかる。

この歌も、その旅程で作られたものとみてよいのではないかとの説がある。

・この歌に詠われている『倉無の浜』については江戸前期の辞書、福岡藩の漢学者・貝原好古著【和爾雅】わじがでは「豊前国閩無浜」と指摘している。かいばらかうこ

また、角川日本地名大辞典「大分県」によると古代の「豊前国下毛郡」ふぜんのかくしもけんの浜名で、今の^{はまめい}大分県中津市西部を流れる山国川の河口右岸にある

閩無浜くわなしはま（竜王浜ともいう）を指すとされる。」と記されているが、

今は河口付近で山国川が分流し周防灘に注ぐ「中津川」（もと山国川の本流であった。）の河口部を閩無浜といい閩無浜神社がある。

・この地は中津平野にあり昔から米作地帯であり米がよく採れる地帯で、この万葉歌の豊作で収める倉がないという歌にも通ずることなどから閩無浜神社のある閩無浜が有力な説となっている。

「閩無浜」のある中津市の中心部は大分県の北西端に位置し山国川を隔てて、福岡県（豊前市）と対するいわば県境の町である、

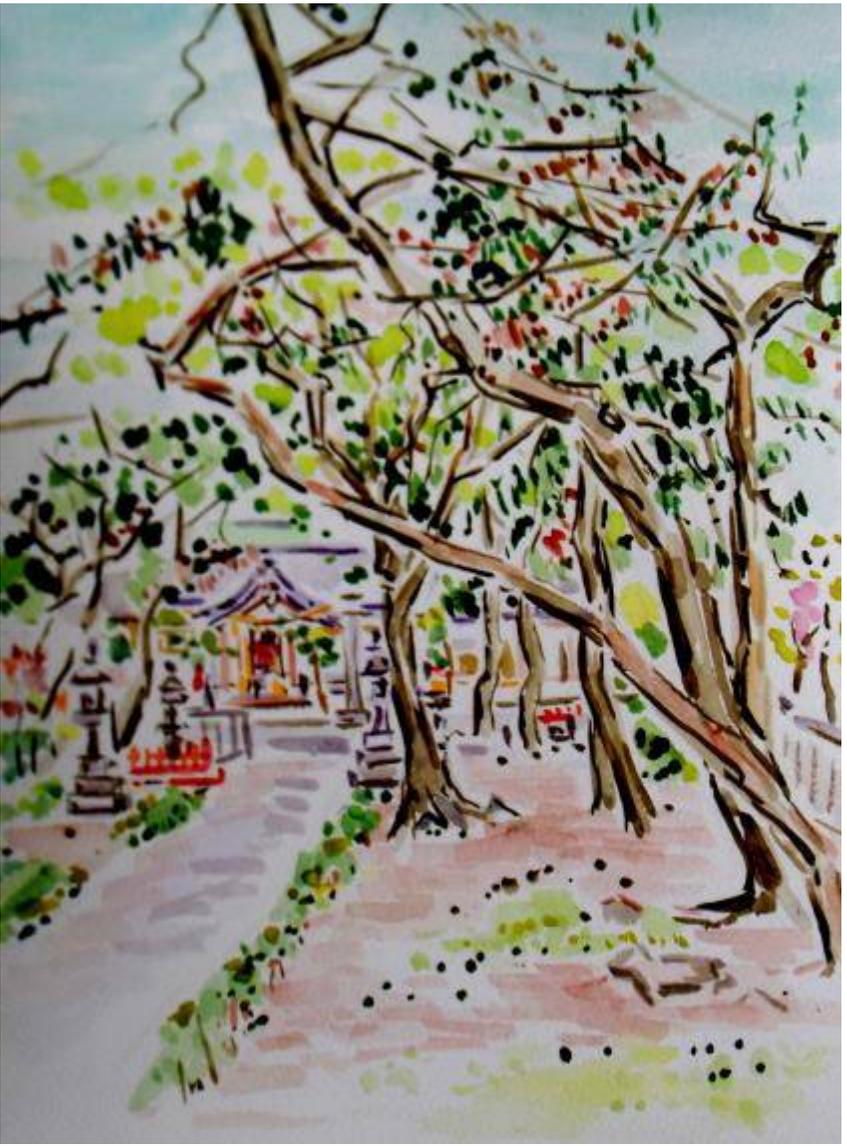
また、市内中心部の南、山国川の上・中流には奇岩や森林、溪流の美しい景勝地として有名な耶馬溪（やばけい）がある。

・公共機関で「閩無浜」を訪ねるには北九州市小倉駅から大分駅を経由して鹿児島駅までを結ぶJR九州・日豊線で大分県にある「中津駅」で下車し駅北口から北へ約10分歩くと中津を故郷とする明

治の先覚者福澤諭吉の旧邸横にでる。さらに北にある浜の方に約5分歩くと中津川の河口堤にでるがその手前に万葉集に歌われた「倉無浜」に比定される閻無浜神社が鎮座している。

・この神社の由来は古く、第十代崇神天皇の昔にさかのぼるとい^{すじん}う。広い境内には、往時の浜松の名残りとおもわれる松林が見られた。

・福岡県中津市角木にある「閻無浜神社」の参道入口から境内風景を描く（杏花）



・境内に建つ中津市教育委員会の説明案内板にはこの地について次の説明があった。「閻無浜は、古よりいとしえ【風光の美は、三保・高砂

の松原にも譲らず」と言われた名勝地で、別名竜王浜ともいいます。昔は。神社のすぐ下を白波が洗い、遠く周防の山々を望み、東は分間浜まで白砂青松が続き、打ち寄せる波の音や松風に、四季の風情は折にふれ、その趣を変え古来より訪れる文人墨客が多くいました。ふんじんぼつきやくとの説明があるが境内からは浜辺は離れ、堤・民家が建ち古いにしえの風情はみられない。

・神社横にある中津川の堤の上にたつと河口部は何回か築かれた堤の影響で次第に水流がなくなり、遠浅となったと見られ、手前の入江には、数隻の船が浅瀬に停泊していた。

『下毛郡誌』には閨無浜から望む風景を「白砂青松の地で北方一帯は近く周防灘洋上に面し、四国・中国の遠巒えんらんを碧波浩蕩へきはこうたうの間に望み・・・」とある。すなわちこの地は周防灘に面し青々とし広々した海面の間から四国・中国の山々が遠くに見えるとの趣旨が述べられている。

・今は古いにしえの閨無浜辺の風景は偲ぶことは出来ないが前面遠方を眺めると四国・中国の山々は、かすんでみる事ができないが、コバルト色をした周防灘が古すおうなだとかわらないと思われる素晴らしい風景を見せてくれる。

(杏花)

「闇無(竜王) 浜風景」



(参考文献)・佐々木均太郎著「豊路万葉をたずねて」・福田良輔著「九州の万葉」
・筑紫 豊著「九州万葉散歩」



(参考)

「關無浜神社一帯の位置図」